

危機に立つ日韓関係

令和元年 9 月 4 日
公益財団法人 国家基本問題研究所
月例研究会
東京・内幸町 イイノホール

危機に立つ日韓関係をテーマに「月例研究会」が行われたのは、9月4日のことだった。この時は、曹国氏が法相に就任（もちろん電撃辞任も）していず、文政権下の検察の動きも変転きわまりないものだった。それ以来、約3カ月の時間が経過した。にもかかわらず、三人の泰斗による韓国情勢分析は今に至るもまったく古びていない。櫻井理事長の言うがごとく、「気持ちは熱く、議論は事実に基づいて冷静に」討論が進められたからだろう。

櫻井よしこ 今日こんなたくさんの方がおいでくださいました。ありがとうございます。

今日は、日本にとって歴史上から見ても関わりが深く、我が国の運命を大きく変えてしまうかもしれない朝鮮半島問題について議論をしたいと思います。このところ、朝鮮半島問題についての日本における報道は、いろいろ加熱しています。しかし、ここは熱い気持ちで、しかも冷静に、事実を中心に、一体、あの国で何が起きているのかということを議論していきたいと思います。

登壇者をご紹介します。まず、西岡力さんです。ご存じのように、西岡さんは国基研の研究者であり、麗澤大学・モラロジー研究センターでも教えておられます。

その次に、鄭大均先生です。鄭先生は日本で生まれ、そして、朝鮮半島、韓国で時間を過ごされ、何年か前に日本国籍をとられました。二つの国を眺めているそのお立場から、有意義なコメントがいただけると思います。

そして、もうお一方、洪熒さんです。洪さんはもともと韓国の軍人でいらっしゃいました。東京の韓国大使館の公使も務めておられて、今は『統一日報』という新聞の主筆を務めています。

朝鮮半島は、韓半島とも言いますが、明らかに今、内戦状態です。私たち国家基本問題研究所は、もうずっと前から、韓国の中では内戦が勃発しているという見地から、さまざまなメッセージを出してきました。そして今、それが、誰の目にも明らかほど激しくなっています。その一つのきっかけが、髪の毛の長い、ホストクラブのホストのような曹国さんという方のスキャンダルが発覚したことです。曹国さんは、次期法務大臣という位置付けです。法務大臣になるかどうか、まだ分かりませんが（注：のち九月九日に任命され、十月十四日に辞任）、彼のスキャンダルが出てきたことで、今の文在寅政権の体質が、非常に

俗な形、分かりやすい形で明らかにされつつあると思います。

この韓国から、西岡さんは、今日（九月四日）帰ってきました。そして、鄭大均さんは、一昨日帰ってきました。そして、洪先生は、先週帰ってきました。お三方にまずレポートをいただいて、そこから議論をしていきたいと思います。

西岡さん、どうぞ。

西岡力 日本であまり報道されていないことを一つご紹介したいと思います。それは、反日ではなく、アンチ反日が出てきたということです。しかも、公然と、「反日に反対する」「反日は愛国ではない」「反日は反逆だ」「日本は敵ではない」「日本は友人だ」と、十万人ほど集まったデモ隊の前で演説をする人たちが現れています。そのデモ隊は韓国の旗とアメリカの旗を持っていますが、中には日の丸もあって、今、挙げたようなスローガンを叫ぶと、「そうだ、その通りだ」と呼応する、そういうデモが八月十五日にソウルの中心部がありました。

その日、日本では「NO安倍」というプラカードを持った夜のデモばかりが報道されました。しかし、その日の午後、ソウルの中心部では激しい雨が降っていましたが、傘を差しながら「反文在寅」「文在寅下野」、というスローガンを掲げた人、なかには「文在寅逮捕しろ」というスローガンもありました。そういう人たちが地下鉄の中から、どんどん、どんどん現れて、地下の道路から、あっという間に、光化門広場だけではなく、ソウル市役所前広場、そして南大門まで車道が全部いっぱいになるという状況でした。

なぜ、こういうことが起きているのか。文政権の反日は、親北の反日だ。これは韓国の自由民主主義、反共という国是を壊すものだという、文政権の反日の本質を見破って、声を大きく上げたということです。

櫻井さんが今、内戦という言葉を使われましたが、銃声は聞こえませんが、政治において、あるいは歴史観、思想において、激しい内戦が戦われていて、その中で、反「反日」が位置付けられ、十万人もの人が集まって、叫びを上げたということです。

また、学者たちも書齋から出てきて、『反日種族主義』という本を出しています。正しく言うと『大韓民国の危機の根源 反日種族主義』というタイトルですが、ソウルの大型書店では、ベストセラーの一位でした。この本の著者の一人、李栄薫さんは私の友人ですが、彼から聞いたところ、八月末現在で、十一万部売れているそうです。

鄭大均 今、西岡さんがおっしゃった『反日種族主義』という本は、画期的な本です。そもそも李栄薫氏は「民族主義」じゃなくて「種族主義」という。「部族主義」と言い換えることもある。かつて日本統治期に朝鮮の古さが語られることは珍しくなかった。百年前に朝鮮を訪ねた谷崎潤一郎は平安朝を主題にした物語に関心があるものは絵巻物を見るよりは、京城や平壤を歩いてみたほうがいいと「朝鮮雑感」に書いてます。朝鮮には古い日本の伝統や風景が残っているという認識です。

しかし、この古さとか停滞性とか後進性の議論が戦後の日本ではタブーになる。とともに、日本人が実質的に韓国との交流を再開した六〇年代以後、日本人は韓国の変化しない

ものよりは変化に目を奪われるようになる。古さの視点で韓国を見るという視点を忘れてしまった。

しかし李栄薫氏は韓国の古さに注目する。韓国が中国に対して限りなく屈従的でありながら、日本には敵対的であるのはなぜか。それは韓国の伝統的な共同体意識に起因するのだというわけです。と同時に、韓国には近代が経験すべき自己批判の歴史がないとか、李氏朝鮮時代の王政や奴隷制が批判的に語られた経験がないという自己批判もする。韓国にはもちろん一方に目まぐるしく変化する側面もありますが、他方には、古いものが連綿と生き続ける状況もあって、反日種族主義はむしろその変わらない側面に注目しているのだと思います。

櫻井 鄭先生がおっしゃった、種族主義の定義というのは、韓国は古いものをそのまま残していて、古いものが全部悪いわけではないけれど、それが排外主義につながっているという意味で、種族主義という言葉を使ったと解釈していいのでしょうか。

鄭 種族主義は明らかに否定的に語られていますね。李氏によれば種族的性格は李承晩大統領や朴正熙大統領の時代には抑制されていたが、民主化以後の韓国にはむしろそれが活性化する状況がある。そのことに対する危機意識がこの本を生み出した動機にあると思います。

種族主義といわれたとき、私なんかはすぐ連想するのは、たとえば韓国人の「群れる」性格ですね。すぐ群衆化する。何十万単位で人が広場や街頭を埋めるというニュースがあるではありませんか。人間は群れる動物であるといいますが、日本人は今やかなり群れない動物になっていますね。そういう社会に住んでいて韓国に出かけると、人間がつるむ性格、徒党を組む性格、群れる性格に出くわして、違和感をもつこともあるが、それに感動する人もある。だから、それ自体は良いこととも悪いことともいえないが、それは付和雷同とかファシズムに結びつきやすい性格のものでしょうか。

もう一つ印象的なことに、韓国人の血縁、血族に対する「宗教的な帰依感」のようなものがある。これだってそれが稀薄な日本に比べると、韓国の健全さと考えることもできますが、これはしかし、より排外主義につながりやすいものではないでしょうか。李栄薫さんの本には、反日種族主義がシャーマニズムやトーテミズムにつながるという議論もあって、これも古さや原初性の議論だと思います。

櫻井 韓国内戦と申し上げましたが、鄭さんは、韓国人特有の共同体意識というか、情によって流される部分が表出しているのではないかということをおっしゃったと思います。

洪熒 今、鄭先生が韓国人は群れるのが好きだとおっしゃいました。私は、群れるなら、今こそソウルで、香港の半分ぐらいの人が立ち上がってほしいと思います。そういう意味で、香港をうらやましく見えています。

(文在寅集団が自慢する)「ろうそく革命」というのは、職業革命家たちがしかけた政変です。彼らの目標は、社会主義の国をつくることです。ところが、ほとんどの日本のメディアは、それを社会主義へのレジームチェンジ(regime change=政体変更)と捉えないで、

単なる政権交代だという間違っただけの伝え方をしてきました。この間違っただけの情報が、韓国に起きていることを理解しにくくし、混乱をもたらす根源にあると思います。

ここ十日間、韓国内戦で重要なことが三つありました。まず、先週、韓国の朴槿恵前大統領に対して、大法院、日本でいう最高裁判所の判決がありました。この判決は一言で言うと、朴槿恵大統領を弾劾したことを弾劾した判決です。この内容について、日本では誰も的確に報道していません。この判決通りだと、文在寅大統領の（退任後の）逮捕は予約されたも同然です。今まで彼ら（文在寅集団）がやってきた判決をそのまま彼らに返せば、彼らはもはや逮捕、有罪が予約されたということです。

八月二十九日の判決は、朴槿恵大統領に対して、二〇一六年十二月に、国会が弾劾訴追を決意したときの理由、それから二〇一七年三月十日に、憲法裁判所が朴槿恵大統領を弾劾罷免したときの理由、その全てが事実でないということです。唯一、賄賂罪が適用されて、有罪になるのは、朴槿恵大統領の友人のチェ・ソウォン、旧名が崔順実ですが、その娘にサムソンから馬三頭を提供してもらったこと。これが朴槿恵への賄賂に当たるというのが有罪の理由です。

朴槿恵に対しての弾劾訴追も、弾劾裁判でも、朴槿恵大統領に対して、最高裁判所は、結局、有罪、無罪を判断しなかったのです。最高裁判所は、検察側の全ての上告を理由なしと却下して、差し戻したのです。つまり、文在寅が任命した最高裁判所の裁判官たちが、この弾劾裁判が、憲法違反だったということを間接的に認めた判決を下したということです。こんな重大なことを、日本ではどこも解説していません。

それからもう一つ、最高裁判所の判決の二日前の八月二十七日に、検察が、法務長官候補者として文在寅が指名した曹国に関して三十二カ所の家宅捜索を始めます。これは何を意味するのか。七月二十五日に就任したばかりの尹錫悦という検察総長が、この家宅捜索を指揮しています。韓国は検察によって、歴代大統領が逮捕され、その末路が悲惨だという、からかうような報道が日本には多い。しかし、言い換えれば、最高権力者たちを在任中に逮捕して処罰する検察が存在していたということです。韓国にはそれなりの法治が機能している確固たる証拠です。

問題の曹国を自分たちの上司である法務長官に任命することに対して、検察が立ち上がったという状況になったのです。すでに、曹国は刑事被疑者になっています。刑事被疑者になれば、二十七日に検察が一斉の家宅捜索をやった段階で、文在寅が自分の指名を撤回するか、曹国が指名を辞退すべきなのです。問題は、文在寅も、曹国も、職業革命家たちも、そういう常識を持っていません。彼らは破廉恥漢です。

さらに三つ目は、八月二十三日にソウルの光化門広場で、韓国の右派の一部が、「一つの中国」を認めるのは間違いだと言いました。台湾についても、一九九二年八月に断交したのは間違いだったと訴えて、台湾との国交復交、正常化を求める集会をしました。日本のメディアは、どこも報道していませんが、台湾では、いろいろなメディアが大きく報道しています。

また、香港の多くの人々が、自分たちは香港人であって中国国民に絶対なりたくないという戦いを展開すると同じように、韓国も今、文在寅が目指す社会主義、共産全体主義の韓国国民にはなれない、我々はあくまでも自由民主主義の韓国、日本、アメリカと一緒に先進海洋文明の中で生きてい内戦を戦っているわけです。

櫻井 今、お三方から伺ったことは、大変大きなメッセージだと思います。私たち、国基研でもそうですが、私が行っている言論テレビでも、韓国が内戦状態にあって、文在寅大統領の左翼革命がどんどん進行していると伝えています。その柱として、北朝鮮系の人々が主要な地位について、メディアを北朝鮮有利にコントロールしていることが、実態としてありますが、司法も文在寅大統領が影響力を及ぼしてきた。

昨年、最高裁長官に極左の金命洙という人をつけた。この人は地方裁判所の所長をしただけで、高等裁判所の所長もすることなく、大抜擢されたのです。この金命洙最高裁長官が、極左です。それから、今年に入って、先ほどお話にありました、検事総長の尹錫悦さんという人も極左で、地方検察庁の長官、所長はしましたが、高等検察庁ではそのような体験はなく、これも大抜擢されて検事総長に就任した。

ですから、文大統領の人事によって、最高裁長官と検事総長が一段飛び、二段飛びで、それぞれトップに就いて、司法は完全に向こう側に取り残されてしまったという認識でいました。ところが、今、洪先生がおっしゃったように、朴槿恵前大統領に対する懲役二十四年を全部破棄して、差し戻しになった。これが、今の最高裁判所によって行われた。

極左だと思ったら、そうではないのかもしれないという動きが、今、韓国の中で起こっているということです。

西岡 朴槿恵大統領に対する大法院判決については、私は洪先生とは違って大法院が正しいことをしたとは思っていません。判決は、ただ法律の適用が間違っていると言っただけです。サムソンの李在鎔副会長を拘束できるようにして、彼が海外に投資しようとしていることを防ぐという背景があるのではないか。そこに馬の問題が絡んできますが、崔順実の娘さんは、アジア大会で金メダルを取った馬術の選手です。選手にサムソンが競技用の馬を寄付するのは本来、美談です。それを賄賂だと認めよとして高裁に差し戻していること自体おかしいと思います。

それより、大きな問題は尹錫悦検事総長の問題です。まさに洪先生おっしゃった通り、今、検察が青瓦台と戦っているという状況が起きています。

日本でも報道されたようですが、曹国さんが、自分の与党出入りの政治部記者だけを集めた記者懇談会をやりました。あれは、記者会見でもなんでもない。スキャンダルについて調べた社会部記者が席にいない。それなのに記者会見したと言っている。そういうことをやった、次の日に、曹国さんの奥さん、大学教授ですが、彼女の研究室が自宅搜索された。

ところが、文大統領は、曹国氏を法相にする任命の手続きに入った。ですから、任命する前か後か、奥さんが逮捕される可能性がある（注：のち十月二十四日に逮捕される）。本

人も、容疑者として呼ばれる可能性は十分ある。通常であれば、本人が辞退する、あるいは指名を撤回するということがあり得るわけですが、強行しようとしています。

韓国の保守派の人たちは二つの見方をしていました。一つは、ガス抜きのために茶番劇をやっているにすぎない。調べることは調べたが、結局、法に触れるようなことはなかったということにしようとしているのではないかという説。もう一つは、いや、そうではなくて、尹錫悦は思想的には左派で、ソウル大学時代からそういう運動をしていた人ですが、思想よりも検察という組織を守ろうとしているのだという説。

曹国は、極左の暴力革命をめざす地下組織、南朝鮮社会主義労働者同盟に入っていて、有罪判決を受けています。そして、その活動について、間違っていたと転向宣言をしていない人間です。しかし、検察組織はそれを問題にしているのではなく、自分たちの組織を守ろうとして、それを奪おうとしている曹国に反旗を翻したという見方です。

曹国が今やろうとしているのは、あるいは、彼を使って文大統領たちがやろうとしているのは、検察から完全に力を奪うということです。検察の上に第二検察、高級公職者犯罪捜査処（公捜処）をつくるというのです。今、その法案が出ています。

さらに、検察の持っている捜査権の一部を警察に渡すために、極左出身で転向していない法律学者の曹という人を、まず民情主席、司法担当の首席秘書官にして、その法案などを作らせて、今度は法務大臣にして、それを完成させようとしてきた。それがいまや検察という組織にまで手を突っ込んできた。しかも、曹は司法試験に受かっていない。この国を引っ張っているのは俺たちだと強いエリート意識がある検事たちが、左も右も関係なく、自分たちの組織を守ろうと立ち上がったということです。

ある面で、韓国の保守のリーダーの人たちは、検事を、広い意味では文明だと思っている。彼らは利用されていたけれど、法律を守るということで今回は動いていると。韓国の文明の力が、今、革命と戦っている。韓国にはまだ、赤に染まっていない文明の力が残っていると考えています。

櫻井 先に進む前に、朴槿恵大統領に対する判決の意味を確認しておきましょう。西岡さんは、法律の適用の仕方が間違っていたということでした。無罪、有罪の判断を最高裁はしていないわけですが、朴槿恵さんに対する今回の最高裁の差し戻し判決の意味をお聞かせください。

洪 弾劾のとき、憲法違反だったというのは、韓国の憲法には、大統領は在任中、内乱、外患の罪のほかは刑事訴追をしないと明記されているからです。それなのに、弾劾の理由が、大統領の地位、権限を利用して企業などの経済活動に不当な圧力を加えたという、強要罪という問題になった。そして、その見返りに賄賂をもらったというのが、最大の理由でした。最高裁判所の今回の判決は、大統領の地位を利用した強要などを全て否定したということです。

それから、朴槿恵大統領個人が賄賂を一銭ももらってないことは、検察が訴えたのにもかかわらず、裁判所は認めました。朴槿恵はもらわなかったのに、自分の友人の娘に提供

された馬三頭が、賄賂罪の有罪の根拠になったのです。

これは政治裁判だったのです。例えば、サムソンが馬を三頭提供したことは、世界的に見て、金持ちたちがバイオリンなど、高価で貴重な楽器を買って、才能のある芸術家たちに貸したり、提供したりするのと同じことです。世界中で、そうしたことが行われていますが、それが芸術家に対しての賄賂でしょうか。文在寅は昨年、平昌冬季オリンピックのとき、企業に対して、選手を支援しなさいと公に圧力を加え、命令もしました。

西岡 賄賂に馬も追加されたのです。だから、サムソンの李在鎔さんは、渡した側になります。ところが、賄賂を渡した人は保釈されて、今、普通に活動しているわけです。合法的に作られた財団に寄付したものについても賄賂ということになっていますから、当然、そこに贈収賄の問題が発生するはずなのです。

櫻井 朴槿恵さんが、弾劾の理由を否定されて、釈放されることはあり得るのですか。

洪 朴槿恵大統領は二年半近く拘束されていますが、今の革命政権の法律解釈によっても、十八ヶ月以上の拘束は全部不当です。だから、差し戻しの段階で、最高裁判所は、最小限、釈放して裁判を受けるようにという判決が必要だったのです。それもしていませんから、これはあくまでも革命裁判なのです。今、西岡先生は検察の言い分を説明なさいましたが、私はそれに同意しません。

櫻井 つまり、今の韓国の司法、最高裁は、やはり文在寅大統領が考える左翼的な司法判断だと見てよろしいのですか。

西岡 無罪になることは絶対ないです。ただ、判決が出た後、恩赦ということは言われています。

櫻井 私が知りたいのは、韓国の最高裁判所が一体どちらの方向に向かっているかということなのです。

洪 問題は、刑が確定したら、刑の執行の中止とか恩赦しかありません。彼らはそれを避けるために、裁判を永遠に延ばしている。恩赦などの余地すら封じてしまい、自分たちが一番有利なときに、朴槿恵大統領を利用する。そのためのカードとして、差し戻しになったと、私は見えています。

櫻井 西岡さん、どうですか。

西岡 恩赦も政治的カードの一つです。曹国の事態によって、保守が今、少し盛り返してきていますので、朴槿恵弾劾に賛成した保守と反対した保守を分裂させるために、朴槿恵恩赦というカードをずっと持っています。

櫻井 文在寅さんは、そこまで国民の意思を無視して、世界の関心は無視する形で曹国氏を法務大臣にしようとしている、その意図はどこにあるのですか。

西岡 まさに検察の上に政治警察を作るということです。政治学の上で、全体主義体制の定義の一つは、政治警察を持っているということです。つまり、ゲシュタポを作ると狙っていると思います。

洪 「検察改革」には大義名分がありました。大統領の命令を聞くような検察では、高位

公職者などを、不正を理由に捜査したり、処罰したりできないという大義名分です。しかし、今、最高の実力者、曹国を検察が捜査することで、彼らの言い分が嘘だったことが証明されてしまいました。現実には、大統領が一ヵ月前に任命した検事総長が、大統領が最も信頼し、文在寅の後継者といわれる人を捜査しているのですから、言い分の全てに根拠がなくなった。そういうことで、今、文在寅政権はパニックに陥っています。

櫻井 文在寅さんは今までにいくつか非常に重要な演説をしています。例えば、今年の八月十五日とか、去年の九月、平壤共同宣言のときとか、去年の四月でしたか、板門店での宣言。読んでみますと、いずれの宣言も、南北朝鮮の民族の融和、統一というものがいかに大事かというところに焦点を当てています。

日本のメディアは、例えば、今年八月十五日の文在寅大統領の演説などは、日本に対して抑制的で、それほど激しくなかったというように言っていました。私は全然そうではないと思います。彼は、日韓関係、もしくは日米関係を踏み台にして、着々と北との連邦政府に向かう方向に踏み出しています。

洪 大体おっしゃった通りですが、連邦制の意味が非常に分かりにくいので、それだけを説明します。例えば、アメリカは連邦制です。高度の自治権を持つ州が集まって連邦制。今、南北の連邦制ということで、たくさんの方々が、同じ民族だから連邦制の可能性はあるんじゃないかと、それも一つのそういう主張ではないかと理解する方々が多いんですね。しかし、日本が共産党支配の中国と一つの国になるという連邦制ができますか。同じ民族だからという形容詞のために、みんな混乱しているのです。彼らの言う連邦制とは、先進国の日本が、共産全体主義の中国と一つの国として連邦制ができるというたぐいのとんでもない主張なのです。

西岡 連邦制を言い始めたのは、金日成です。「高麗連邦共和国にする」と言っていたわけで、それを一部飲んでしまったのが金大中大統領です。二〇〇〇年六月、平壤に行って、「低い段階の連邦制と韓国のいう連合制は同じ方向を向いているから、それで統一をする」という憲法違反の六・一五共同宣言にサインをしてしまったのです。実は、文大統領は大統領になる前、金大中大統領の追悼集会で、「低い段階の連邦制ができないことは、金大中大統領に対して恥ずかしい」という挨拶をしています。その人が、今、大統領になっているのです。八月十五日の演説では、「二〇四〇年に統一する」と言っています。しかし、それはカモフラージュで、もっと早いスケジュールを考えている。「低い段階の連邦制でやれ」と、「六・一五宣言を守れ」と北朝鮮に言われていて、去年九月に平壤に行って「守ります」と言って帰ってきたわけです。

文は、平壤で数十万の群衆が集まった中で、自分のことを“南側の大統領”と自己紹介した。そして、金正恩氏のことを“国務委員長”と言った。国という言葉金正恩に使った。自分は南側と言った。しかし、韓国の憲法は、大韓民国の領土は半島全体だと書いてあります。北朝鮮が反国家団体なのに、自分は南側の大統領だと言い、相手を国と言った。これは憲法違反だ、弾劾に値すると、韓国の保守派は言っているわけです。その南側の

統領だということの延長線上には南北の連邦制があると思います。

櫻井 日本から見ると、南北朝鮮の民族融和であるとか、文在寅さんの理屈はほんとに理解できないものです。自由とか民主主義とか、日韓関係とか、米韓同盟とか、そういったものを犠牲にしても北朝鮮との融和に走っていく文在寅政権を、私たち日本人はどう理解したらいいのか。そして、なにゆえに韓国の人たちはこのような大統領を選んでしまうのかということですか。

例えば、金大中さんが、いかに北朝鮮にこびへつらう形で、二〇〇〇年の南北首脳会談を行ったのか。例えば、五億ドル、一ドル一〇〇円とすれば、約五百億円のヤミ献金を、金正日委員長に差し出して、ようやく南北首脳会談を実現させてもらったわけです。このことは、その瞬間には分からなかったけれど、しばらくしてから、お金が渡っていたことが韓国でも分かったわけです。それなのに、なぜ金大中さんが多数の支持を得たのか。そして、その価値観を受け継ぐ盧武鉉さんを、なぜ大統領に選んだのか、そしてまた、文在寅をなぜ選んだのか、このへんの朝鮮民族の気持ちを、どう理解したらいいのでしょうか。

鄭 私も、よくわかりません。

櫻井 北朝鮮の情報工作がすごくうまくいったということに尽きるのでしょうか。

鄭 それだけでしょうかね。これは私のかなり勝手な眺めですが、南と北は一卵性双生児の関係にあって、北の兄弟姉妹が住む国は金氏家族に支配された全体主義国家である。だから南の人間が南で生まれたことを良かったと考えるのはおかしくない。かつて反共の時代に韓国が北に対して、その政治・経済・文化的優越性を語ったのはその意味でおかしなことではない。

しかし民主化以後、こういう眺めはむしろマイナーになった。かつて北との異質性を強調していたはずの知識人やメディアが、今では異質性に目を背け、北の南に対する歴史・道徳的優越性が公的に語られることもある。あれよという間に、反共ナショナリズムの国が民族ナショナリズムの国に変貌したわけです。それにしても、なぜに韓国の反共がかくももろくも揺らいでしまったのか。そこには北の工作もあっただろうし、日本のリベラルや左派たちの協力もあっただろうし、反共が世界的に格好悪く見えるという時代精神とも無縁ではないでしょう。

加えて、ここにはこの国が北と一卵性双生児の関係に起因する不条理や不合理や分かりにくさもあると思います。南北が一卵性双生児の関係にあるということは、南北間に種族主義的運命共同性の感覚が胚胎しやすいことを意味する。かつて反共の時代に韓国が北に対して、その優越性を語ったと申しましたが、だからあの時代にだって、南北の異質性を強調し、ネガティブ・キャンペーンを繰り返す態度に反感はあったのだと思います。それは反種族主義的ですからね。

しかし昨今は風向きが変わって、北への共感キャンペーンが展開される時代になっている。しかしそれは、李栄薫氏風にいえば、種族主義が活性化される時代を意味するもので、それは国を危機に導くものである。一卵性双生児にネガティブ・キャンペーンを展開する

という態度には確かに罪作りの面がある。しかし、韓国にとって重要なことは原初的欲望を自己抑制して合理的欲望を優先するという態度でしょう。「民族」より「国家」を重視するという態度です。昔の韓国のインテリなんかは今のそれより魅力的に見えたのは、彼らとその種の自己葛藤のなかで生きていたからではありませんか。

櫻井 鄭さんがおっしゃるように南北朝鮮の方々の気持ちを読むことがとても難しいのなら、私たち日本人が朝鮮半島の人の気持ちを読み解くのはもっと難しいと感じます。

八月十五日の演説の中で、文在寅さんはこう言っています。「これからの韓国は橋梁国家になる。橋のような国になる。これは海洋同盟と大陸同盟、海洋国家と大陸国家の間をつなぐ国となる」と。

西岡 私も、その演説のその部分を読んで、やっぱりそうかと思いました。つまり、韓国の現代史は、海洋国家として歩んできて、アメリカと同盟を結び、自由民主主義、市場経済を導入し、そして日本と国交正常化をして、南方三国同盟の中で、海洋国家として発展してきたわけです。そして、大陸国家とは、北朝鮮であり、中国共産党の一元独裁体制であり、ロシアであるわけです。そこの両方の橋になる、つまり海洋国家から抜けて中間に立つと言っている。そのことは、今回、GSOMIA（軍事情報包括保護協定）を破棄したことに通じるのではないかと。

かつて、盧武鉉大統領が選挙演説で、「北朝鮮とアメリカが対立したとき、そのバランスになる」と言ったのですが、韓国人が本当にその方向を選ぶのであれば、日本にとっても大変なことが起きるだろうと思います。

GSOMIA破棄に対して、アメリカは強い失望を繰り返し言っています。それも「韓国が」と言わないで、「文政権に失望した」と言っています。まさにそのことを見抜いた韓国の保守派が、反日に反対する、親北に反対する、というデモを行っているということです。

櫻井 文在寅政権は、今すぐ米韓同盟に手を加えることができなくても、いずれ米韓同盟を韓国は離れると、明確に宣言したと理解してよろしいですか。

洪 はい、韓国ではなく、文在寅政権という反逆集団がです。私は、何回も強調しますが、今の政変を主導した文在寅など職業革命家たちは、革命を起こし、社会主義の国をつくるという権力欲と謀略のほかには、香港の高校生ほどの教養すら持ってはいないのです。

誤解しないように付け加えますが、盧武鉉政権発足のとき、社会主義、共産主義、韓半島統一への青写真を描いたような一冊の本が出ました。もう十七年前のことですが、そこに、自分たちが権力を奪えば、韓半島の未来を北と中国のほうに持っていく、韓米同盟は破棄する、と書いてあります。

そもそもマルクスによれば、共産主義は、一番発達した資本主義の社会から革命が起きるはずでした。しかし、現実には逆で、一番遅れたロシアから、ボリシェヴィキ革命が起きたのです。それで、共産主義者たちは、どうすれば発展した資本主義の国でも革命を起こせるのか、真剣に反省します。そうして、一九二〇年代、三〇年代には、発達した資本主

義の国で革命を起こす方法論を作り上げました。それを明らかな形で残したのが、有名なイタリアのアントニオ・グラムシです。

韓国の職業革命家たちは、アントニオ・グラムシが予言した通りに、資本主義、民主制度の弱点を利用して革命に成功したのです。この本質を理解してほしいと思います。文在寅の革命家集団を韓国と混同しても困るし、韓国の人々が、みな社会主義を夢見る妄想家のように捉えても困ります。

韓国が一九八八年のオリンピックの後、三十年以上も左傾化したことを、日本では「民主化」と呼んで、今もそう報道しています。これは間違いです。だから、私は（韓国を誤解するようにした）メディアの罪と言ったわけです。

西岡 まさに、李栄薫先生が『反日種族主義』で、反日種族主義の文化権力に正面からぶつかっていくのだ。そのために、この本を書いたと言っていますが、グラムシの言うことがそれなのです。文化をまず握る。その中には歴史観も含まれるわけです。

ですから、反日を通じて反韓に行く。李栄薫先生は前から言っていますが、彼らが作った反韓史観が反日種族主義の到達点です。韓国という国は生まれたときから汚れた国だという。なぜなら、親日派をきちんと処断しなかったからだ。そして、朴正熙大統領は親日派の親玉ではないか。日本の陸士出身だ。だから汚れているのだ。その目で見ると、北朝鮮は民族的に正当性がある。韓国に米軍はいるが、北には外国の軍隊がない、主体的である。貧しいが、民族的な正当性が北にはある。こうした歴史観が八十年代に地下の革命家の中で、わっと広がり、それが今、韓国の教科書に全部書かれています。テレビもそう報道しています。その結果として、文政権ができた。まさに、文化権力を先に握られて、その後、最終的に政治権力を握られたということですから、根源から覆すため李栄薫先生は文化権力に体を張って戦うと言っています。そのため、李先生たちは、今、名誉毀損など刑事、民事で訴えられています。

櫻井 韓国の文在寅政権は社会主義政権だということですね。社会主義、共産主義体制、これは独裁体制ですが、文政権はそこを目指しているのだと言っても、しばらく前は日本の方々、「そんなばかな」と言う方が多かったのですが、今ようやく少しずつ、その認識が広がってきたという感じはします。

そこにもう一つ、私たち日本人が加えなければならない要素があります。それは、反日の要素です。八月十五日の文在寅大統領の演説の中に、日本人として非常に気になることがありました。それは「韓国の国民が味わった六十年の苦しみ」という言葉です。六十年というのは、日清戦争、日露戦争、日中戦争、そして第二次世界大戦で、およそ六十年の間に、大きな四つの戦争が起きているわけです。この六十年が韓半島にとって、ものすごく苦難の道だったと書いてある。それでは、朝鮮戦争は、一体、どこにあるのかということ。昭和二十五年に勃発し、三年間続いた朝鮮戦争によって、どれだけ多くの朝鮮民族が殺し合ったか、今に至る南北分断の悲劇はそこから始まっているわけです。

さらに時代をさかのぼれば、漢の武帝の時代にどれだけひどい目に遭ったか、随の煬帝

の時代、毎年毎年攻め込まれていたとか、明や清の時代にはもう五百年間も、属国、冊封体制のもとで、毎年三千人の美女を連れてこいとか、千人の腕のいいコックを連れてこいとかいわれ、ひどい目に遭っていたわけです。そうした歴史には全然触れないで、日清、日露、日中、そして第二次世界大戦、これらは全部日本が関わったもので、日本だけが悪いと言っている。日本だけが悪くて、こんなに朝鮮民族が苦しくなったという考え方が、今、先生方がおっしゃった、社会主義への憧れとか、韓国よりも北朝鮮のほうが良いという、ばかな考え方と一緒にあって、日本に向かってくるわけです。

西岡 洪先生がおっしゃっている通り、文政権と韓国国民を一緒に見てはならないと思います。曹国さんも、ほんとに偽善者で、革命をやっていた人が娘の不正入学のようなことをやるのかと思いますが、問題の本質は、彼が社会主義革命を目指した人で、転向していない革命家だということです。その人が法務大臣になろうとしている。その部分が日本ではあまり報道されていない。韓国ではそれに対して激しい戦いが、起きています。

私は二〇〇五年に『韓国分裂』という本を書きましたが、まさにそういうことがずっと起きていて、今、最後の戦いが起きているということです。もう一つ、韓国だけ見ていると文政権が優勢のように見えますが、日本で見るときには北朝鮮まで一緒に見るべきだと思います。

実は、朴槿恵政権の末期に、北朝鮮で金正恩暗殺未遂事件がありました。そのことについて、今、韓国の『月刊朝鮮』が、暗殺未遂を起こした北朝鮮の中の地下組織と連絡を取っていた、NGOの人の手記を連載しています。そのNGOのリーダーは、昔からの知り合いです。今回、ソウルで会って、話を聞いてきましたが、北朝鮮の中に反金正恩勢力がいて、金正恩を除去して、韓国の朴正熙政権をモデルにした市場経済を導入して北朝鮮の経済を上へ上げた後、韓国との間で自由統一をしたいというビジョンを持って活動をして、処刑された人たちがいたということです。暗殺未遂事件を起こせるということは、かなり高いレベルの人も加わっていたということです。

その暗殺未遂事件があったのは、まさに、朴槿恵弾劾があった年です。あのとき暗殺が成功していれば、逆に自由統一になっていたかもしれない。文さんたちが政権を取れなかったかもしれない。

両方の中で激しい争いがあるって、片方は自由民主主義、人権、市場経済という文明を目指し、もう一方は全体主義を目指す。その両者が、北の中でも韓国の中でも戦っている。それが香港でも行われている、中国の中でも行われている。日本人はそうした大きな絵を見て、日本が何をすべきかを考えるべきだと思います。

櫻井 朴槿恵さんが大統領だったとき、最初は、北朝鮮に呼びかけたり、中国にへつらったりしていました。しかし、あるときから北朝鮮に対して、毅然と対応するようになり、北朝鮮からの脱北者を奨励するようなメッセージを出しました。これは、軍でも政府でもハイランクの人を脱北させようということ呼びかけたのです。それがかなり成功していたので、かなり高位の方々が亡命してきた。それを危険視した北のほうと韓国のほうで連

携して、朴槿恵大統領に対する、でっちあげの収賄事件をやって弾劾にまで至りました。南北の間の保守勢力に対する反対の動きが連携していた。その一面だと、この暗殺事件は見てよろしいですか。

西岡 二〇一六年の確か夏だと思います。北朝鮮が核実験をし、ミサイルをバンバン撃っているとき、朴槿恵大統領が、それを止めないなら韓国はレジームチェンジを目指すと、韓国の大統領として、初めて言いました。北朝鮮の高位高官の人たちをどんどん韓国に呼びますと言ったのです。そういう人たちの中には、将軍や三十九号室という党の資金関係者や保衛部の幹部などが含まれていました。私は当時それらの高官の韓国帰順を確認しましたが、それ以外にも内部の反政府勢力とつながっていた人もいます。

洪 櫻井先生と一緒に作った本の『韓国壊乱』で、私が結論的に書いたのは、韓国は今、三つの戦争を同時に戦っているということです。韓半島を支配しようとする中国との戦い。それから、この七十年以上の（韓半島の）南北朝鮮の戦争。そして、韓国内の戦い。この三つを、韓国は今、同時に戦っているのです。

韓国の建国以来七十一年間に、北は、発覚しただけで三人の大統領を暗殺しようとしてきました。李承晩と朴正熙大統領と、それから全斗煥大統領の三人を暗殺しようとして北はたくさんでいました。しかし、北はソウルオリンピック以降の大統領たちの暗殺を謀っていません。なぜなら、左傾化した韓国大統領たちは暗殺する必要がない。彼らを利用すればいいと考えているからです。

では、対中国の戦争はどうか。我々が戦う中国共産全体主義との戦争は、今、米中戦争として、我々の戦争の一部になっていますが、実は我々の文明の戦争なのです。アメリカが韓半島で中国と戦うのは、二度目です。米中戦争の要衝の一つが韓半島ですが、一九五〇年六月から一九五三年七月まで三十七ヵ月、アメリカは毛沢東の中国と韓半島で戦いました。韓半島で戦死したアメリカ軍のほとんどは、中国共産党の義勇軍によって犠牲者になりました。アメリカが韓半島を取るのか、中国が韓半島を取るのかというのが、今の米中戦争の本質の一つです。しかし、日本はあまりにも長い間、平和国家としてやってきましたので、そうした戦争に対しての緊張感がありません。韓半島の未来のことは、ほんとうに、米中戦争にかかっています。

韓国国民は二種類に分かれました。自由のために戦う香港人と同じような気持ちを持つ韓国人と、配給制で飯が食える、生まれてから死ぬまで国が面倒見てくれるのがいいという、社会主義の奴隷のような国民との二つに分かれています。今、日本は、二つのどちらを日本の味方にすればいいのか、ある意味で日本も選択を迫られているのではないかと思います。

櫻井 鄭先生、コメントありますか。

鄭 日本も選択を迫られていると思いますが、実際のところ多くの日本人は、韓半島の動きとは別世界に生きている。同時に八十年代以後の日韓関係を見ると、日本人はもう一つの選択を迫られているともいえる。

八十年代以後の日韓関係に特徴的なのは歴史道徳的な関係です。日韓が加害・被害者に仕分けられ、加害者には自己否定や贖罪が、被害者には自己肯定や告発・糾弾の役割が与えられるという「罪の政治学」の時代に生きているということです。今日の嫌韓の基調にあるのは、こうした役割関係に対する反発で、私もそれを共有するものです。「加害・被害者アイデンティティ」は日韓双方を劣化させ、衰退させると考えるからです。

なんでそんな風に考えるようになったのか。私はかつて韓国籍を持つ在日だったのですが、在日の生き心地は七十年代あたりから急激に変わった。在日であることはかつて多くの在日にとっては貧しさや恥ずかしさと一体の経験であり、犯罪とも近い距離にありました。だから、在日であるとか韓国・朝鮮籍を持つことを当たり前のことのように自己受容することが難しい状況があった。

ところが、この状況が七十年代あたりから変化する。在日の犠牲者性が承認され、文化的異質性に関心が寄せられるようになったのがその契機で、在日の生き心地はそのころから随分改善されたと思います。先ほど加害・被害者性を軸にして展開されるアイデンティティ政治のことに少し触れましたが、日韓の前に日本人と在日の間にアイデンティティ政治が形成されていて、それが在日にとっては民族的な属性を自己受容することを容易にする契機になったと思います。

アイデンティティ政治にはこのように肯定的といえる産物がある。しかし弊害も少なくない。七十年代というと私はまだ学生でしたが、その時期になると、いつの間にか被害者として発言するとかそれに類する役割が期待されることがある。それが得意な人もいるのですが、私にはそういう演技力がないというか、どうも気持ち悪いという感覚がある。自分の被害者体験をさりげなく語ればいいんですが、しかしそれをすると、自分が偽善者になるという感覚があったわけです。

そうこうするうちに一九八一年から私は日本語教師として韓国で教えるようになりますが、やがて日韓の間にもっと大規模な偽善者劇が演じられていることに気がつく。先に述べた「罪の政治学」が日韓の間に展開されるようになったのがその時期で、私のような人間も在日の犠牲者性を語ることが期待されることがある。これもさりげなくというか、他人事のように語ればいいわけで、そんなに難しいことではなかったかもしれない。しかしここでも私には違和感があった。韓国で在日がその犠牲者性を語るということは、韓国人が犠牲者性を語ることへの補助的役割になりますが、私にはそもそも韓国人が日本に対して犠牲者性を語ることに強い違和感がある。にもかかわらず韓国の期待に沿ってそれを語ったら、やはり偽善になるではありませんか。

最近の韓国の特に左派系インテリたちに見られるのは偽善とうぬぼれの境地ですね。もはや自己陶醉の境地です。中国やアメリカを語るときに出てくる緊張感や注意深さが日本を語るときには全然出て来ない。文在寅なんかその代表選手でしょう。だからこの日本で、韓国批判が出てくるのはおかしくない。ただし、韓国批判にレイシスト（racist：差別主義者）的発言が出てくるのは注意しなければならない。たとえばここにある雑誌があつて、

その表紙に「韓国人はなぜうそつきなのか」とある。こういうタイトルは韓国の友人や知人には見られたくないですね。韓国にうそつきはもちろんいます。今の政権なんかうそつき政権といわれておかしくない。しかし、うそつき政権に対抗する勢力もあるではないですか。それに「うそつき政権」といったけど、今の政権の根本的な問題は人にうそをついているというより、自分にうそをついているということでしょう。

にもかかわらず、「韓国人はなぜうそつきか」と日本人がいったら、うそを韓国人の民族性や属性として語ることになるでしょう。それはレイシスト、レイシズムではないですか。そんなこといってたら、批判されるべきは日本人ということになるではありませんか。

どうしたらいいんでしょうか。人間を理解するのは容易ではないわけです。自分を理解することだって、子供を理解することだってみんな難しい。ところが今日の嫌韓論には、韓国人なんて全部分かってらあという態度があるではありませんか。彼らの韓国に対する態度には人間や集団に対する関心や観察が欠けているのではないですか。幸いわれらの国基研はそういう意味では注意深さがあっていい。特に横にいる西岡さんとは長いおつきあいで、尊敬している人ですが、しかし見ると、この雑誌には西岡さんも書いていますね。

西岡 書いていますよ。

鄭 西岡さんの文はレイシズムとは無縁の文だし、そういう論考もある。にもかかわらず、それを「韓国人はなぜうそつきなのか」というレイシズムのラベルでパッケージ化するのは危ういわけです。こういうタイトルにすると、売上げがアップするんでしょうが、そういう欲望が抑制されないと、やがて指弾される時代がくる。我々は「罪の政治学」の時代を生きているんですよ。我々は少数派に過ぎないんですよ。

櫻井 今の鄭大均さんのお話に、反論したくなる人もいるかと思いますが、実は、とても大事なポイントだと思います。やっぱり批判するときにはきちんと批判する。「きちんと」という意味の中には、「適切な表現」ということが入っているわけです。

そこで、文在寅政権と韓国の人を分けて考えるということが、大変重要になります。今、私たちが、韓国という場合、文政権も韓国の人々もみんな一緒くたに考えがちですが、そこが激しく分断されていて、内戦という状況の中で戦われているわけです。北朝鮮のほうが韓国よりずっといい、そして社会主義がいい、自由とか民主主義とか国際法、条約などというものは踏みにじってもいいという姿勢を持っている文在寅政権と、それに反対する韓国の一般大衆、保守派の人たちのことを、しっかりと分けて考えたいと思います。

それで、ここで聞きしたいのは、ホワイト国から除外するという騒動から始まって、どうしても日本側の説明する論理が韓国には通らない。文在寅政権が全然それを認めないということだけではなく、韓国のメディアも認めない。もちろん、メディアそのものが、北朝鮮勢力に乗っ取られていることもあると思うのですが、鄭大均先生がおっしゃったように、文字通りうそばかりの印象がある文在寅政権の韓国と、これから日本は、歴史問題も含めて、国際関係の中で、どう付き合っていけばいいのかという大きなテーマがあります。

西岡 先ほど鄭さんがおっしゃったことに、全く賛成です。例えば、「お前の母さん、でべそ」と言っただけです。そうではなく、「何月何日にあなたが言ったことは間違っています。その理由はこうです」と言うべきで、生まれつきのことを言ったらおしまいです。向こうも、「日本人はもともと残虐だ」ということを言い返すことになってしまいます。

だから、民族性の議論をする前に、文明論的に見るべきなのです。全体主義と自由民主主義が今戦っている。香港は、儒教文化圏の中でも、ああいうことが起きている。そして台湾もあります。韓国の中でも、自由民主主義の側に立っている人たちもいるわけです。日本の自由民主主義は皇室を中心とする自由民主主義ですから、他国とは違いますが、韓国には韓国の、チャイニーズにはチャイニーズの自由民主主義があるんです。でなければ、普遍的価値観と言えない。我々は普遍的価値観を信じるべきだという立場から、国基研をずっとやってきたわけです。普通の自由民主主義国家になることは、相手の文化を尊重するという形ですが、韓国でも普通の自由民主主義は成り立つのです。

櫻井 今、思い出しましたが、国基研が十二年前にできたとき、韓国に行って、韓国のシンクタンクと意見交換をしました。私たちはそのとき、韓国が自由民主主義の旗を掲げて北朝鮮と一緒に統合して、韓国主導の朝鮮半島統一をやり遂げるべきであって、私たちは思想・信条的にこれを支持すると言いました。向こうの方は、その言葉を全然信じられなくて、日本人はみんな、朝鮮半島が分断され、争いをしていて、不幸な状態であることを望んでいると思っていた、と言われたことを覚えています。

鄭 『反日種族主義』という本は、翻訳されるまで何ヵ月かかかりそうです（注：十一月十四日発売／文藝春秋刊）。本が出たら是非ともお読み頂きたいのですが、その前に「李承晩テレビ」を観るのはいかがでしょうか。YouTubeの映像です。今韓国で大胆な発言をしている李栄薫さんやその仲間たちが一体どんな顔つきをして、どんな仕草で講義をしているのを観察してみたらいいじゃないですか。李栄薫さんは慶尚北道の地方都市で生まれた人で、ソウル大を退任されて二年ぐらいでしょうか。ソウル大経済学部の教授は、ほとんどが欧米の、主にはアメリカのPh. D. を持っていますが、彼だけはソウル大の博士号で、この人は国際派というより国内派なんです。なぜこういう人間が出てきたんでしょうかね。とまれ『反日種族主義』は、李栄薫さんがその仲間たちと命をかけて刊行した韓国批判の本です。そんな本は滅多にあるものではない。ぜひYouTube鑑賞してほしい。

洪 先ほど、韓国は二つの国民がいると申し上げましたが、文在寅は日本の敵です。アメリカの敵、韓国の敵、文明の敵です。ですから、文在寅を倒そうとする人々がどう考えているか、何を狙っているのかを紹介したいと思います。

安倍さんの貿易管理措置、ホワイト国リストから外した措置に対して、文在寅を倒そうとする韓国のまじめな人々は、非常に高く評価しています。日本が文在寅と韓国国民を切り離して考えているという証拠として、その冷静な態度を高く評価しているということをまず申し上げたいと思います。

韓国は、新しい国づくりには成功しましたが、その国にふさわしい国民づくりに失敗したのです。それは、今の状況を見れば、よくわかります。そこで今、私たちは、立派な国にふさわしい、新しい韓国人をどうすればつくれるのかという運動を展開しています。例えば、真実はどうなことでも尊重されなくてはならない、あるいは、わけのわからない民主主義より自由民主主義こそが尊いといったことを教えて、国民が二度と文在寅のようなテログループに扇動され、だまされないよう、国民の教養づくりをしていきます。

韓国人の「反日感情」について言えば、私は、反日感情は存在しない、反日イデオロギーだけがあると、ずっと言ってきました。それを本格的に取り上げたのが、まさに『反日種族主義』という本です。

櫻井 日本がこれから何をすべきか。私たちにとって関心のあることだと思いますが、私は、基本的に、安倍政権が行っていることは正しいと思っています。それは、ホワイト国から外した、きちんとした理屈を付けて外した。そして、韓国に対して言うべきことは言う。しかし、協調していかなければいけないことはきちんと協調していくことです。

今日は、軍事に触る時間はありませんでしたが、皆さん方からのコメント、もしくはご質問を受け付けたいと思います。国基研研究員の太田文雄さん、お願いします。

太田 私は、軍事をずっとやってきましたが、文在寅政権の前から、韓国は日本を敵だと思っていますと見ています。私は海上自衛隊出身ですから、韓国の海軍の船の名前を見ると、よくわかります。今一番大きい、ヘリコプター揚陸艦に「独島」、竹島の名前を付けています。それから、駆逐艦の名前に「李舜臣」。つまり、秀吉の水軍をやっつけた将軍の名前を付けている。潜水艦の名前には、伊藤博文を暗殺した「安重根」、あるいは、上海で、手榴弾によって白川大将を暗殺した「尹奉吉」、そういう人たちの名前を付けているわけです。それは、明らかに日本を敵視しているということです。

その中で、韓国の国防費は、五兆弱。日本は五兆強。しかも、韓国の国防費は年々七・五%で上昇しているのに対して、日本は大体一・二%の増加ですから、いずれ逆転するだろうと思います。装備を見ても、日本まで届く弾道ミサイル、あるいは巡航ミサイルを持っている。陸軍士官学校出身で、元軍人の洪さん、いかがですか。

洪 私は、艦名を変えろと、海軍にいつも言っています。それが先ほどの、反日種族主義につながる問題です。この七十四年間、北では金日成の抗日闘争の神話ができ、中国共産党、北など、アントニオ・グラムシの末裔たちによって、韓国を反日の国にして日本と戦わせる方向に持ってきた。韓国は、なぜ日本に対して、中国共産党と金日成王朝の代理戦争をするのかと、私はソウルでずっと言い続けてきました。

先ほど西岡先生は韓国の保守は二つあるとおっしゃった。親日の保守と反日の保守。この反日の保守は、ほんとの保守ではありません。ほんとの保守なら反日にはなれません。彼らは卑怯にも、特に政治家たちは親日派のレッテルが貼られるのが怖いのです。次の選挙で落ちますから。具体的に名前を出しますと、朴槿恵の弾劾に賛成した金武星などの臆病者で卑怯な政治家たちが、こうした状況を放置してきたのです。

韓国は今の混乱を乗り越えて次の世代になっていけば、台湾と国交正常化を求めるような国になり、彼らは日本との同盟を主張していますから、彼らが主流となる韓国になれば、この艦名問題もなくなると思います。

櫻井 太田さんが指摘したように、韓国の国防費は今、五兆円弱です。安倍政権のもとで日本の国防費は、少しずつ増えていますが、今、五兆三千億ぐらいです。非常に少ない増加率で推移していますから、まもなく韓国の軍事費が日本の軍事費よりも多くなるときがきます。

今、韓国は内戦状態だということをずっと言ってきました。私たちは、民主派、保守派が、この戦いに勝ってほしいと思っています。しかし、これは、基本的に韓国の皆さん方の戦いで、私たちがそこに入っていくことは許されません。もちろん、モラルサポートはしますが、基本的に韓国の国民の皆さん方が決めることです。私たちが望むように、民主派の人が文在寅政権を倒して、新しい政府をつくるのならいいのですが、もしそうでなくなったときはどうなるのか。そのことも韓国に一番近い国として、頭に入れておかなければいけません。

これは、今、韓国の六十万人の軍隊が向こう側に行ってしまうかもしれない。そしてまた、もしもアメリカと北朝鮮との交渉の中で、金正恩委員長が核やミサイルを諦めないものであるならば、朝鮮半島には核もミサイルも残るということです。彼らが開発しているミサイルは、日本の国防関係の専門家によると、もし日本向けに発射されたら、私たちの国はそれを防ぐことができないと言われてしています。

安全保障の面において、我が国がもっと強い力で我が国の国民を守り、国土領海を守ることができるような体制をつくらなければいけません。これは、防衛費をもっと増やす、海上保安庁の予算をもっと増やすといった物理的なことに加えて、やっぱり憲法改正というものが非常に大きなテーマとしてあるわけです。

会場からの質問 (西岡氏の通訳で) 私は韓国人です。日本と韓国が経済的にも安保の面でも統一すれば、今出ている問題はいっぺんに解決できるのではないかと思います、どうでしょうか。

西岡 それはできないと思います。同盟はできるとは思いますが、歴史、そして民族が違いますから、一つになることはできない。それができなかったことを証明するのが、日本の統治時代です。韓国は韓国として自由民主主義を守る。そして、もう一步進んで、条件が満たされれば、同盟関係をつくることはできるとは思います。しかし、統一は難しいというか、私は不可能だと思っています。

質問 韓国の政治制度について、先ほど洪先生から、韓国では左傾化のことを民主化というというお話がありました。それは、一九八〇年代後半、憲法改正されて、大統領が直接選挙で選ばれるようになった以降のことを指しておられると思います。国民が直接自分で民主的に大統領を選べるようになったことは、素晴らしいことだと思っていますが、洪先生にお伺いしたいのは、韓国をよりよくするために、どのようなリーダーの選び方がいい

のでしょうか。

洪 お答えする前に、先ほど韓国の国防費の話が出ましたので、その点について、お話ししたいと思います。韓国は国防費がもっと必要です。中国共産党が無力化され、ロシアの脅威がなくなるまで、つまり、韓国と日本を核ミサイルで狙っている中国、平壤、ロシアが無力化するまでは、韓国の国防費は増やすべきだと思います。

韓国は国民の投票で選んでいるのではないかというお話ですが、それはその通りです。一番の問題は、メディアです。健全な自由民主が機能するためには、言論が健全であることが前提です。メディアが間違った勢力によって、一方的に有権者を扇動するような役割をするという状況では、健全な民主制度、選挙制度は機能しません。その例が今の韓国です。

誰をリーダーに選ぶかという問題もそこに関係してきます。普通の選挙では、出馬した人々の中から選びます。しかし、今の韓国はまさに内戦状態、戦争ですから、この混乱を乗り切るには有能な人、戦闘的な自由主義者がリーダーになるべきだと思います。

櫻井 先ほど洪先生は、今、韓国がしなければいけないことの中で、民主主義より自由主義のほうが大事だとおっしゃいました。現在、文在寅大統領がしようとしていることは選挙制度の改革です。この改革を成し遂げれば、いわゆる革命政権もしくは極左政党が議席を飛躍的に伸ばすような制度改革をやろうとしています。このまま行けば、それが成立して、来年の四月の選挙では左翼政権、左翼政党が三分の二をとってしまうと思います。

そして、彼が目指しているのは、憲法改正です。その憲法改正の中の一つに、極めて象徴的なことがあります。今の憲法では韓国は“自由民主主義”の国という規定がありますが、この中から“自由”を取って、“民主主義”の国にしようとしているのです。

私たちは、民主主義の国にしても、別にそれは悪いことではないと思うかもしれませんが。しかし、これは人民民主主義なのです。皆さん、北朝鮮の国名を思い出しましょう。朝鮮民主主義人民共和国です。民主主義は、多くの人々の意見をまとめて、多くの賛成を得られた政策をやります。しかし、文政権が狙っているのは、自由がない、思想・信条の自由も、言論の自由も、表現の自由もない民主主義です。その実態が今、朝鮮半島にあるということは、覚えておく必要があると思います。

西岡 その「自由」を取ろうという憲法改正案を作った、中心人物が曹国です。

櫻井 ここに、国会議員の木原稔先生（自民党）と田嶋要先生（立憲民主党）がいらっしやいます。一言ずつコメントをいただきたいと思います。

木原 自民党の木原です。今回の問題が収まったとしても、これからまた、第二、第三の文在寅のような人が出てこないともかぎりません。しかし、これは思想なので、押さえつけることはできないと思います。どうすれば、反日イデオロギーの方が選ばれないようにできるのか。それが韓国では、一番大事だろうと思います。

私は、よく台湾に行きますが、台湾も日本が統治していた時代が長くありました。台湾には、今の国立台湾大学、昔の台北帝国大学があり、ソウル大学の前身も京城帝国大学です。日本は、そこで高等教育を推進してきました。決して一方的な植民地政策ではなかつ

たということは台湾を見ればよくわかります。もちろん、台湾にも、言語を変えられたとか、反日イデオロギーは多少あります。しかし、それを政治が利用するということはありません。ですから、反日イデオロギーをどうやって押さえるかということについて、洪さん、どうですか。

洪 第二、第三の文在寅が現れるのではないかというお話ですが、例えば、戦後の西ドイツの場合、韓国の国家保安法の十倍もの共産主義の侵略を阻止するための法的な措置がありました。韓国はただ一つしかなかったのですが、北も、文在寅も、韓国の国家保安法を無力化したのです。日本のメディアも、日本の国民も、韓国の職業革命家たちを民主化の運動家と勘違いして支援したのです。これは、歴史的な事実です。

しかし、どの先進国も建国七十年から百年の間に、韓国のようなことを経験しています。アメリカも南北戦争がありましたし、ほとんどの国でそういうことがあります。それを、我々は教訓としていきたい。先ほど、香港の人々がうらやましい、立派だと申し上げました。今の香港で、どうして百万人、二百万人の、それも十代、二十代が中心となって、こういう文明の戦いができるのか。韓国にも二十代、三十代の層に自由主義集団が現れつつあります。韓国もそういう方向へと進むよう、我々はこれから取り組んでいきます。韓国を滅亡に導いている彼らを日本とアメリカの力を借りながら、我々は制圧できるという希望を持っています。

櫻井 田嶋さん、一言、どうぞ。

田嶋 衆議院議員の田嶋要です。今日の日韓の問題を見る中で、いろいろ触発されて、資料を見たり、本を読み直したりしていますが、三点、考えたことがあります。

一つは、先ほど櫻井先生から、まさか、こんな政権だとはつい最近まで、思っていなかった人が多かったのではないか。それが、ここに来て明らかになってきたというご指摘がありました。私もそうした感じを共有していますが、その危機感が、文政権ができる前の日本、あるいは、アメリカ、自由主義の国々で共有されていたのか。その点に関して、振り返って、ご指摘されることがあったらいただきたいということです。

二点目は、私の理解では、韓国から日本に毎年七百五十万人ぐらいの人が来ております。そして、日本からは二百五十万人ぐらいが行っています。それが今、急ブレーキがかかっているわけです。いわゆる草の根の交流が弱まっていくのは、両国にとって、非常に残念なことです。私たちの自由主義を守るシンパを増やすという意味では、やはり民間も努力をして、草の根の交流がもう一度高まっていく努力を両国でしていかなければいけないということを、改めて、私も危機感を持って考えています。

三点目ですが、韓国の国会議員には、四期以上の人がほとんどいません。ほとんどは三期までで、どんどん変わっていつてしまう。私は、日韓のいろいろな交流にも行かしていただいておりますが、やっぱりこれは長い双方の信頼関係をつくるという意味では、ちょっと残念です。日本の場合は、逆に、当選十五回という方もいらっしゃいます。

それが、すべて良いとは言いませんが、やはり、人生の大先輩であり、政治の大先輩た

ちは、過去のいろいろな政治のことを踏まえて、今日の時間、空間の中で捉えていくということができる。お隣の国のことに、差し出がましいですが、議員間交流をしようにも、韓国側の顔ぶれが変わるということを、私はよく聞いています。どうした事情でそういうことになっているのか、教えていただきたいと思います。

櫻井 三点ありましたので、まず、西岡さんに、今までに、こんな文在寅政権が誕生するという危険性を示したことがあったのかということをお聞きしたい。それから、鄭大均先生には、日韓両方で一千万人近くの国民が往来していますが、このことの意味、そして、それをどうやって続けていくのか。それから、洪先生には、どうして四期以上の方がそんなに少ないのかということをお答えいただければと思います。

西岡 韓国の中で起きていることを、アメリカも日本も正しく報道していません。特派員はたくさんいますが、韓国のマスコミがおかしくなっていることをわかっていないまま、韓国のマスコミの書いていることをそのまま書いている。朴槿恵弾劾のとき、私は文政権になったら大変だと思っていました。韓国の保守派の人たちも、そう思っていて、三十万人の弾劾反対デモが起きましたが、マスコミはそれを伝えなかった。それをしたのは言論テレビだけです。

櫻井 伝えたのは、言論テレビと国基研だけです。

西岡 私もずっと書いています。文政権ができたとき、危険な政権だと書きました。まさに洪先生がおっしゃったように、今の革命家たちを民主化の闘士だと誤解している。そういう人を、アメリカの特に民主党系の人たちが応援してきた。日本の朝日新聞も応援してきた。二番目のことについて、一つだけ言いますが、日本の中にもっと韓国の専門家を増やすべきだと思います。韓国語ができなければダメですが、そういう人を、こういうときこそ増やしたい。

鄭 韓国には反日主義イデオロギーというものがあって、日本に対する否定的なステレオタイプが学校教育やメディアの報道を通してすり込まれ、内面化する過程がある。そのことは比較的知られていると思いますが、注目すべきは、にもかかわらず、それは必ずしも完成したものではないということではないでしょうか。反日主義にもかかわらず、日本に対する好意的な感情もあるということです。好意や憧憬の思考や感情も生きている。つまり日本人と韓国人との眺め合いに特徴的なのはアンビバレンス（両面感情）の性格なんです。かつて私は『韓国のイメージ』と『日本のイメージ』という二冊の本で日本人の韓国観や韓国人の日本観について記したことがありますが、一番強調したかったのはそのアンビバレンスの性格です。アンビバレンスは反日プロパガンダに付け入るスキを与えるが、他方で、封じ込められているかに見える日本に対する肯定的眺めや感情が状況次第では活性化する可能性を示唆するものです。反日の国・韓国からこれだけ膨大な数の韓国人旅行者がやってくるのは、このアンビバレンスと無関係ではないでしょう。

洪 なぜ、四期以上の議員がほとんどいないのか。これは、鋭いご指摘です。今の韓国の国会は、建国以来、二十代目の国会です。最初の、制憲国会だけが任期二年で、その後、

任期四年でずっと続いて、来年やるとしたら、二十一回目の総選挙になります。全部調べたら、小選挙区制となった現行憲法で新人の当選率は、一番低いときでも三九・一%（一九九二年三月）、多いときは六二・五%（二〇〇四年四月）でした。

なぜこうなるのか。今の韓国憲法は、一九八七年、つまり三十二年前の九回目の改憲による憲法です。このときが政変でした。全斗煥大統領のときです。このときから大統領の任期が一期五年になるんですが、それ以降、今、ご指摘の、政変によって世代交代が行われたんです。金泳三時代には、革新といって職業革命家出身を公認します。「新しい血」、「若い血」と言い輸血したのです。そして、金大中、特に盧武鉉政権になると、「支配階層の代替」という言葉を使います。そのように、アントニオ・グラムシの末裔たちが描いた革命のシナリオをもとに、かぎりなく粛正をする。韓国は国会解散がありませんから、一期四年×四＝十六年になれば、四十五歳に初当選しても、六十歳以上になります。そうすると、左翼は、「お前はもう古い」と言って、自分たちが用意した新しい革命家出身をどんどん公認する。こういう構図が続いているからです。

櫻井 皆さま、今回はありがとうございました。いつも多くの方が来てくださって、長い時間、ほんとに熱心に聞いてくださいます。とても感動しております。

そして、今、日本は正念場に来ていると感じています。香港を見ても、台湾を見ても、それから朝鮮半島を見ても、日本の周りは大変な地殻変動が起きていて、この百年か二百年に一回の大変化の中で、私たちは、もっともっと神経を研ぎ澄まして、周りの変化に対応していかなければ、日本国は沈んでいくだろうと思います。

さて、国基研は、憲法改正の先頭に立ちたいと思いますし、またそのほかの問題提起もしていきたいと思っています。いつも全力疾走していますが、これからも全力で疾走して、皆さん方と一緒に、この国をもっとすばらしい国に変えていくことをお約束いたします。

そこで、お願いします。今日、若い方もずいぶん来てくださっていますが、若い世代を国基研の会員としてお迎えして、若い世代と一緒に考えていきたいと思っていますので、ぜひ、若いお友だちを会員としてご紹介していただければと思います。どうぞよろしくお願いたします。（了）

【登壇者略歴】

櫻井よしこ（さくらい よしこ）

ハワイ大学卒業（アジア史専攻）。クリスチャン・サイエンス・モニター紙東京支局員、日本テレビのニュースキャスターなどを経て、フリージャーナリスト。平成19年に国家基本問題研究所を設立し、理事長に就任。大宅壮一ノンフィクション賞、菊池寛賞、フジサンケイグループの正論大賞を受賞。「21世紀の日本と憲法」有識者懇談会（通称、民間憲法臨調）の代表を務めている。著書は『愛国者たちへ 論戦 2018-2019』『問答無用』『韓国壊乱 文在寅政権に何が起きているのか』『朝日リスク 暴走する報道権力が民主主義を壊す』『チベット 自由への闘い』『一刀両断』『日本の未来』『日本の勝機—米中間の変化に果敢に向き合え』など多数。

西岡 力（にしおか つとむ）

1956年生まれ。国際基督教大学卒。筑波大学大学院地域研究研究科修了。在ソウル日本大使館専門調査員等を歴任。東京基督教大学教授を経て、現在、麗澤大学客員教授、モラロジー研究所歴史研究室長。北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会（救う会）会長。朝日新聞「慰安婦報道」に対する独立検証委員会副委員長。国家基本問題研究所評議員・企画委員。正論大賞受賞。著書は『横田めぐみさんたちを取り戻すのは今しかない』『朝日新聞「日本人への大罪」』『よくわかる慰安婦問題』『歴史を捏造する反日国家・韓国』『でっちあげの徴用工問題』など多数。

鄭 大均（てい たいきん）

1948年生まれ。立教大学とUCLAで学ぶ。韓国の慶南大学、東亜大学、啓明大学で教えた後、東京都立大学（現首都大学東京）人文学部助教授となり、2013年、同大学名誉教授に就任。日韓の国民アイデンティティやエスニック・アイデンティティを研究テーマとする。第12回大平正芳記念賞受賞。国家基本問題研究所理事。著書・編著に『韓国のイメージ』『日本のイメージ』『韓国のナショナリズム』『在日・強制連行の神話』『在日の耐えられない軽さ』『姜尚中を批判する』『韓国が「反日」をやめる日は来るのか』『日韓併合期ベストエッセイ集』など。

洪 熒（ホン ヒョン）

1948年生まれ。韓国陸軍士官学校を卒業し、歩兵将校として野戦部隊の小隊長などを経て国防部に勤務。その後外務部へ転職後、駐日韓国大使館で参事官と公使を務める。退官後は早稲田大学客員研究員と桜美林大学客員教授を経て、『統一日報』主幹。著書は『韓国壊乱 文在寅政権に何が起きているのか』『日中韓歴史大論争』（いずれも共著）、『激動の東北アジア 韓国の進路』『韓国の自衛的核武装論』『暴政による人間の退化』（いずれも訳書）など。